

認知症サポーターの活動事例とチームオレンジ取り組み事例 表彰団体一覧

部門	応募者
「認知症サポーターの活動事例」 (自治体) 【最優秀賞】	名古屋市中区地域包括ケア推進会議認知症専門部会 (愛知県名古屋市) ◆地域住民と商店街を核とした認知症バリアフリーのまちづくり 選考理由: 市内でも有数の商店街を擁する都市部の特徴を生かした認知症サポーターの活動、認知症バリアフリーの取り組みを実践している。 地域包括支援センター、行政、キャラバン・メイト、住民サポーター、商店街サポーター、学生サポーター、当事者等多彩な立場から参加し、商店街向けサポーター講座の開催から、見守りや啓発イベント等を通して課題の共有や協力体制を構築している。 スマートフォンアプリを活用し地域の社会資源の情報が一括して登録された「まちプラオレンジマップ」作成にも、多様な立場の人が関わり、認知症サポーター協力店の増加などにより、さらに活用方法を充実させるよう進化をつづけるプロジェクトとなっている。
「認知症サポーターの活動事例」 (自治体) 【優秀賞】	東区認知症ライフサポートワーカー (福岡県福岡市) ◆認知症に優しいまちを目指した情報発信と地域の繋がりがづくり 選考理由: 医療・介護の専門性の高いキャラバン・メイトがさらに研修を受けた「認知症ライフサポートワーカー」が中心となり、多様な組織との連携協力し、認知症かどうかにかかわらず暮らしやすい地域づくりやそのための情報発信の場をつくっている。 若い世代(大学)を巻き込み、工夫を凝らした情報発信ツール(サイトや SNS の活用)を開発・活用することで、自由な発想を取り入れながら社会情勢にも即した地域づくりの新しい方向性を見出している。
「認知症サポーターの活動事例」 (企業・職域団体) 【最優秀賞】	株式会社福井銀行 ◆認知症の早期発見・対応への貢献により育む新時代の企業文化 選考理由: 銀行で直面している様々な接客場面を営業店からヒアリング、認知症疾患医療センターの医師等をはじめとする専門機関からの助言、情報交換を通して、多様な顧客の目線から「認知症の方へのサポートガイドライン」を作成。職員で情報共有することで、スムーズに地域包括支援センターとの連携を図り、知識に裏付けされた接客の指針となっている。 企業が主体的に早期発見に役立つガイドラインを作成し、業務にも役立てている地域共生のあり方は画期的なものとして評価される。
「認知症サポーターの活動事例」 (企業・職域団体) 【優秀賞】	第一生命保険株式会社 横浜総合支社 (神奈川県横浜市) ◆地域の課題解決につながる企業サポーターの活動事例 選考理由: 自治体等との協定や見守り活動等への登録の他、サポーターとなった職員が地域の社会資源や認知症カフェに関する情報提供などを顧客等へ向けても行う。 地域の課題解決の視点に基づく取り組みが、家族介護をする職員への支援や本業の接客スキルアップ等にもつながり、職員が前向きに認知症についてとらえ活動する機会を創出している。

「認知症サポーターの活動事例」
(企業・職域団体)

【特別賞】

株式会社イトーヨーカ堂

◆サポーター養成を通して地域の現実に向き合う企業の挑戦と進化

選考理由:自治体との協定締結にも積極的であり、協定をスタート地点として高齢者を含む多様な住民が集う場を提供することを通し、介護予防や見守りにも貢献するコミュニティの拠点となっている。

地域包括支援センターと企業職員での座談会を開催するなど、店舗としての具体的な課題を共有、対応策を検討した上でその結果を盛り込んだ、より実践的なサポーター講座を行うことで、従業員の自信につながる効果を上げている。地域の状況を把握した上での、綿密な連携の図り方の模索は他の企業の手本となる。

「チームオレンジ取り組み事例」

【最優秀賞】

チーム♡KOGANEHARA

(千葉県松戸市)

◆交流拠点は「栗カフェ・ガーデン」(畑)

メンバーの知恵と個性が結集したチームオレンジ

選考理由:カフェ開催が難しい状況下で、それまで活動していたサポーターや当事者で可能な活動を模索する中でチームオレンジを結成。

地域包括支援センターの法人敷地内の畑・中庭を活動拠点とし、「栗カフェ・ガーデン」と名づけた畑での活動を現在の交流場所の中心としている。10人超の本人が参加し、週1回の畑仕事の他にも、外出支援やバトウォーク等を行い、密を回避しながらも楽しく参加し、見守りや安否確認等にも結びつく、地域に必要とされる活動を実践しており評価に値する。

「チームオレンジ取り組み事例」

【優秀賞】

チームオレンジ矢巾

(岩手県矢巾町)

◆多様な機関の連携を土台に地域が必要とする助け合い活動を展開

選考理由:平成25年に結成されたキャラバン・メイト連絡会が核になり行ってきたボランティアや見守り活動、高齢者にやさしいお店システムや地域内の各種相談支援との連携体制を基盤に、本人・家族や住民サポーターが主体的に活動しやすいよう再構築し、チームオレンジとして立ち上げた。

既存の社会資源や活動を生かしつつ、多様な立場の住民参加により活性化される活動のしくみがつくられている。

使用されていなかった旧町民食堂をメンバーで改装し拠点にするなど、楽しく工夫をし、カフェやサロン、出前ボランティア等各種活動も活発に展開されており手本となる取り組みである。

「チームオレンジ取り組み事例」

【特別賞】

チームオレンジ上飯島 第1

(群馬県玉村町)

◆近所づきあいの延長線上の活動が希望ある日常をつくる

選考理由:コロナ禍で地域包括支援センターに寄せられた介護家族からの相談を契機に、ステップアップ講座受講済みのサポーターにコーディネーターが声をかけ、地域での活動を望む本人の日常生活や社会参加に必要な支援を検討するところから、メンバー5名のチームオレンジの結成に至った。

本人を含むメンバーの社会参加、家族の負担軽減が図られる中で、地域での生活継続に結びついている。

週1回、小学生の下校時に見守りウォーキングを行うなど、感染症対策も考慮した工夫ある活動を実践している。

(町では身近な単位でチームを立ち上げられる支援を行っている)

ステップアップ講座についても医療機関との協力を図りながら具体的な支援に役立つ構成としている。

近所づきあいの延長線上にあるチームオレンジとして地域での暮らしに希望をもてる取り組みとして評価される。